

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 45 2017. 6

特別寄稿

栃内吉彦先生小伝 (第1回) 栃内 香次 -----	1
----------------------------	---

活動報告

平成28年度総会報告 在田 一則 -----	6
北大総合博物館行事予定 -----	8
舘脇先生の思い出 小島 覚 -----	9
2005年北大総合博物館ボランティアニュース第3号発行の頃 高橋 英樹 -----	10
化石ボランティア 石橋七朗さんと中野系さんを偲んで 田中 公教 -----	11
考古(骨)ボランティア2016年度活動報告 田中 望羽 -----	12
新渡戸稲造・萬里子(メアリー)からの贈り物再発見 佐藤 広行 -----	13
チェンバロボランティア活動報告 新妻 美紀 -----	14

特別寄稿

栃内吉彦先生小伝* (第1回)

北海道大学名誉教授 栃内 香次**

1 はじめに

しばらく前、北海道大学総合博物館ボランティアの一員である私の妹、宮本昌子を通じて父、栃内吉彦の小伝を掲載してはというお話があった。

これまで本誌に掲載された何編かの小伝を拝見すると、各編の著者はそれぞれの先生と専門分野はもちろん、お仕事の上でも強いつながりがある方々の方である。しかし、我々は、親子の関係であり、身近には違くないが専門や仕事の上でのつながりは全くといってよいほどない。子供の頃、家に訪ねてこられた父の同僚や若手の先生方と交わされていた様々な会話の断片などから、何となく聞きかじった事柄から、こんな日常を送り、仕

事をしていたのかなと想像するしかない。

という次第で、この小伝は「伝」というより我々の記憶に残っている父の思い出の「断片」といったものになりそうである。ただ、父は学生時代から、折に触れ様々なところはかなり多くの文章を書いていて、随筆集としてまとめて出版されたものもあり、その多くが手元に残っている。そこで、それらを資料として、我々の記憶に残っている様々な思い出とを組み合わせ構成して行こうと考えている。

そのような次第で著者は一応私としたが、実質は私と宮本昌子の合作と考えていただきたいと思う。

*タイトル「栃内吉彦先生小伝」は、編集委員会による

** 栃内香次：1939（昭和14）年札幌生まれ。1964（昭和39）年3月北海道大学大学院工学研究科修士課程修了。北海道大学工学部講師、助教授を経て1987（昭和62）年同教授。2002（平成14）年4月北海学園大学大学院経営学研究科教授（後、経営学部設置に伴い経営学部教授）。2010（平成22）年3月同大学定年退職、現在に至る。父の血を受け継いだのか様々のことに興味を持つが、いずれも広く浅くであり、一心不乱に打ち込んだ趣味はない。また、父と同じ趣味は音楽鑑賞くらいである。

2 生き立ちと学校時代

父、栃内吉彦（写真 1）は、1893（明治 26）年 12 月 1 日生まれである。一般には東京市生まれとなっているが、生地は母親（栃内 繁）の生家のあった栃木県栃木町（現、栃木市）である。

小学校、中学校時代に関する資料はほとんど残っていないが、わずかに残っている記録として、小学校時代からの友人で後に銀座審美堂の社長、会長をされた山岡猪之助さんの追悼録に寄せた追悼文の中で、本郷の曙町（現、文京区本駒込）に住んでいて誠之尋常小学校（現在も文京区立として存続している）に通学し、小学 4 年のときに麻布の永坂（現、港区麻布永坂町）に転居して三河台尋常小学校に転校し、その後高等小学校 2 年を経て中学に入学したと述べている。小学校が 6 年まで一貫した義務教育になる以前の古い話である。

中学は東京府立一中（現、都立日比谷高校）であるが、この時期についての記録は、わずかに同窓会名簿や後年開かれたクラス会の写真くらいしか残っていない。この頃から生物には興味があったと聞いたことがあり、植物学を志した原点はこの時代にあるのかもしれない。中学を卒業した父は、1912（大正元）年 9 月、東北帝国大学農科大学予科（現在の北大）に入学した。予科入学の直後、有島武郎先生との出会いがあり、美術に興味があった父は先生の薦めによって黒百合会に入った。このことは 1931（昭和 6）年発行の『黒百合会回顧録』（北海道帝国大学文武会美術部）に寄稿したかなり長文のエッセイに書かれている（写真 2）。今回しばらくぶりに読み返してみ、今から 100 年以上の昔、本州各地からはるばる札幌に来て北大に入学した学生達の心境を偲ぶことができた。

父はあまり沢山の画は描かなかったようであるが、北アルプスの燕岳を描いた一枚は気にいっていたらしくずっと書斎に飾っており（写真 3）、前記『黒百合会回顧録』巻頭にある会員作品の写真ページにも載っている。

さて、父が学生であった時期は北大が東北大から分離して 2 つの大学が創設されるという大きな



写真 1 栃内吉彦（59 歳、農学部長就任のとき）
1952 年 3 月研究室にて。

変化の時代であった。北海道大学と東北大学の設立にはいろいろ複雑な関連があり、農科大学と理科大学からなる東北帝国大学の設置に関する勅令が 1907（明治 40）年 6 月に公布された後、同年 9 月に札幌農学校が東北帝国大学農科大学に昇格したが、理科大学は未設置であった。したがって名称は東北帝国大学であるが、分科大学（学部）は札幌の農科大学だけであり、仙台に理科大学が設置されたのは 1911（明治 44）年 1 月であった。このようないきさつで、東北帝国大学設立の当初は札幌農学校長から農科大学長に任ぜられた佐藤昌介先生が総長代行を務められたとのことである。それで、父が入学したのは東北帝国大学農科大学であるが、実質的には北大に入学したといえるであろう。北大が分離独立して北海道帝国大学が設立されたのは 1918（大正 7）年 4 月である。

したがって、父が卒業したのは北海道帝国大学設立直後の 6 月ということになり、よく「俺は東北帝大時代の終わりの頃に入学して北海道帝大の最初の卒業生になった」と聞かされたのを思い出す。以上に述べた北大設立当時についての状況については多くの資料があり、よく知られているが、父の学生時代とはほぼ重なっているので、冗長かもしれないが、触れてみた。

北大を目指したのは宮部金吾先生に師事することを強く薦めた父親（栃内曾次郎）の影響が大きかったようで、後年になっても折に触れてそのことを口にし、またいくつかのエッセイにも書き残している。栃内曾次郎と北大（当時の札幌農学校）および札幌とのつながりは明治初期のわが家の歴史における重要なできごとであるが、現在から百数十年をさかのぼる遠い過去の話で、その詳細はもはや不明であるが、明治初年、少年時代の曾次郎が兄、元吉のところに身を寄せて札幌農学校予科に通っていたおり、当時札幌農学校在学中の同郷（岩手県）の先輩、新渡戸稲造先生を訪ねたとき、寮で同室であった宮部金吾先生にも会い、そのお人柄に強く惹かれたのがきっかけであったようである。

父は1915（大正4）年7月に予科を卒業して引き続き本科に進学し、1918（大正7）年7月に北海道帝国大学農科大学第3部（現、農学部農業生物学科）を卒業した。本科では宮部先生のもとで植物病理学を学んだ。卒業論文の研究テーマは亜麻立ち枯れ病菌（*Fusarium lini*）の研究で、菌を培養し、その性質を系統的に調べるという実験的研究であった。亜麻は帆布、ロープなどに利用された重要な作物で、日本での栽培適地は北海道だけであり、明治初期の開拓使時代から北海道の特産農作物として奨励され、1940年代まで広く栽培されていたが、その後合成繊維の時代となって廃れ、現在ではほとんど見られない。以前は札幌近郊でも広く栽培され、その名残は札幌の麻生、江別の大麻等の地名に残っている。



写真2 有島武郎先生送別会（北大黒百合会回顧録1931年より）。中列左から2人目の背の高い人が父（予科2年の秋）。

亜麻立ち枯れ病は日本や米国でしばしば流行し、重大な病害として植物病理学の重要な研究課題だったようで、父の卒業研究のテーマとなったこともうなずける。この研究はその後父の学位論文につながり、在外研究の際も各地の大学でこの分野の研究者と議論したことが後年書いたエッセイで触れられている。

余談ではあるが、上記のような事情で北海道内には亜麻を原料とする繊維産業が発展し、あちこちに工場が作られたようである。昔から札幌にお住まいの方なら、開拓使が開設した工場を起源とする、札幌駅の北東にあった「帝国繊維」を記憶されていると思う（その跡地はテイセンホールを経て、現在は高層マンションになっている）。

なお、亜麻立ち枯れ病の原因であるフザリウム菌は細菌ではなく、キノコや酵母などの仲間に分類される生物群で、人間にとって有用なものから種々の植物の病害を引き起こす病原体となる厄介な代物まで非常に多くの種類があるが、土壌中で生活し、種々の植物の根に寄生して病害を起こすものが多く、今日でも園芸関係の文献でよく触れられている。父の研究テーマであった亜麻立ち枯れ病はその後日本やアメリカでの研究と、すでに対策が講じられていたヨーロッパでの実践等の成果をもとに、連作を避けて輪作を行う手法が確立して流行は絶えたとのことである。



写真3 「つばくろ岳の思出」1923年作。
この年10月の黒百合会第16回展覧会に出品。

3 北大の時代 前期 (1920年代)

父は北海道帝国大学卒業後農学実科講師となり、翌1919年8月に農学部助手となった(写真4)。その後20歳代後半から30歳代前半にかけて、父は植物病理学の研究者の道を本格的に歩みはじめた。この時期の研究業績を見ると、種々の作物の土壌病害に関する研究が中心で、卒業論文の研究テーマから継続して興味を持っていたようである。これらの研究の集大成として、亜麻立ち枯れ病の病原菌である *Fusarium lini* と、同じく亜麻炭疽病の病原菌である *Colletotrichum lini* の生理学的比較研究の成果をまとめた学位論文に対し、1925(大正14)年7月に農学博士の学位を授与された。また、すでにこの頃から専門の学術論文とならんで、農業関係の様々の出版物に農作物の病害とその防除に関する解説記事を執筆していて、病害に限らず動植物一般にかかわる様々なことがらを研究者の立場から分かりやすく伝えていくという、後年まで続く文筆活動を若いうちから続けていたことがわかる。

話は変わるが、父は1926(大正15)年11月に北大山岳部が設立されたとき、初代の部長になり、途中在外研究の2年間は中断したが、1936(昭和11)年3月まで在任した。父が書いた山関係のいろいろな文章、家にある北大山岳部部報その他の資料を見ても、また子供たちに語ってくれたこともないので、初代山岳部長になった経緯はよく分からないが、生物学の研究者は採集、調査などで山に入ることが多く、そのような教官たちが集まって、山好きな学生たちの相談に乗っているうちに山岳



写真4 1919年9月夏休みを東京の実家で過ごしたおりの吉彦の両親(後列)と妹たち(前列)。

部創立に関わっていったようである。

父は以前から山歩きが好きで、休みに帰京した際には本州中部の山々を歩いていたようで、黒百合会のところで触れたように、山を描いた作品も何枚かあり、また、楨有恒氏の『山行』やヒマラヤ登山など、山岳関係の書物もかなり集めていて、それも父の山好きの証左かと思う。後年まで続く山草への興味も山歩きに伴って増していったのであろう。山岳部の記録によると、部長在任中は毎年年末の1週間にニセコ新見温泉や十勝吹上温泉での冬山合宿に参加し、好きなお酒も飲まずに学生たちと山やスキーを楽しんだようである。

ところで、歴代の山岳部長や山岳部OB会である北大山の会会長のお名前を拝見すると、伊藤秀五郎先生、犬飼哲夫先生、渡辺千尚先生など農業生物学科出身の先生方のお名前が眼に止まる。渡辺さん、東晃さんはお住まいが近く、子供の頃母に連れられてよくお訪ねしたことを思い出す。また、山岳部報各巻の山行記録を見ると、農業生物学科におられた方々のお名前が随所に見られ、後年しばしば我が家を訪ねて来られ、専門の話から森羅万象にいたるまで和気あいあいとお酒を酌み交わしながら議論をしていたことが記憶に残っている。

父は山についてもいくつかのエッセイを書いている。その中で私の眼から見て興味深い数編を紹介したい。

かなり初期の著作として、1931(昭和6)年発行の北大山岳部報第3号に寄稿した「第零義的登山」という1編がある。ここでは自分の専門である生物学を例にとって、研究を本務とする者は、山を歩く際にも常に研究者の眼をもって事物を見なければならないと説いている。おそらくこれは父にとって山に入るときの基本的なスタンスであったと思われる。

もう一つ、ずっと後、1942(昭和17)年に台湾山岳会刊行の「台湾山岳」第12号に寄せた「南の山と北の山—雪の札幌から台湾の山岳を偲びて—」という1編がある。これは、1940(昭和15)年11月に演習林視察のため台湾に出張したおり、最高峰玉山(当時の名称は新高山)に登ったときの記

録である。全体で10ページであるが、前半3ページは北海道の冬山の厳しさに触れ、その年1月に起きた山岳部のペテガリ岳登山における雪崩による遭難について、吹雪に阻まれてかなわなかったその2年前の試みも含めて詳しく述べ、遭難した部員たちへの追悼文ともなっている。この後、玉山登山の主部に移るが、初日はその年夏の大雨で登山路が各所で崩壊して迂回を余儀なくされて悪路に苦勞したが、その代わり珍しい寄生植物を発見して採集することができ、崩壊もまんざら悪くなかったと述べていて、生物学研究者の本領を発揮しているなど感じさせる。なお、翌日は好天に恵まれ、山頂からの眺望を楽しんだようである。

この台湾出張と玉山登山は強い印象を残したようで、ずっと後の1972（昭和47）年10月に刊行された札幌同窓会報第8号に寄稿した「六十年」というエッセイでも取り上げている。この中で、父は北大予科に入学して札幌に来た1912（大正元）年から丁度60年になると書き出し、札幌で過ごした年月を振り返っている1編であるが、忘れられない思い出としてかなりの紙数をあてている。

父は1928（昭和3）年2月から1930（昭和5）年3月にかけて、在外研究のため米欧各国に留学した。主たる滞在国はアメリカ、イギリス、ドイツの3カ国である。在外研究の際の研究課題の一つとして、このときも亜麻立ち枯れ病菌に関する課題が含まれていて、この菌の分類学的な位置づけに関して疑問点を感じその点を実験を行いながら各国の研究者と議論しようという問題意識を持っていたようである。

さて、父は2月7日に横浜を出港してアメリカに向かったのであるが、おりから風邪を引いていたのが悪化し、数日後には肺炎を起こして39度から40度の高熱が続く重態となり、約1週間後、ホノルルで下船して入院することになって、思いがけずハワイに滞在することになった。入院後もしばらくは高熱が続いたようであるが、次第に快方に向かい、3月に入ると入院中ではあったが外出できるようになり、その機会を利用してハワイ大学などを訪問したりハワイの農業事情を視察した

りしてその後約1ヶ月を過ごした。ホノルルを去って米本土に向かったのは4月下旬のことで、予定より2ヶ月弱遅れてアメリカ大陸に到着したのであった。この事件は後々まで記憶に残る出来事だったようで、我々子供達が物心ついた戦後になってからもときどきそのことを話してくれた。

しかし、その後のスケジュールにはそれほど大きな支障はなかったようで、今日から見ればゆっくりと時間が流れていた当時の旅の様子が偲ばれる。なお、その後は2年間の外国滞在中、幸い大きな病にかかることもなかったようである。

アメリカ滞在の拠点はウィスコンシン大学であったが、ニューヨークで開かれた学会に出席したり、東部から南東部にわたる各地の大学や研究機関を訪れており、アメリカの東部各地を広く旅行していたようである。残された写真のアルバムを見ると、そのような旅行の一つとして、知人の研究者と一緒に自動車でニューオーリンズまで往復する長途の旅があったようで、そのときは運転免許を取っていたらしい。このことは私がまだ小学生の頃1、2度話してくれただけであり、詳しいことはわからない。

なお、この時期の北大は工学部に引き続き理学部が創設された頃であり、創設時の教授就任が予定されている多数の先生方が在外研究で各国に滞在されていた。父の写真アルバムには、イリノイ大学に留学中であった理学部創設の際の初代の教授のお一人である太秦康光先生ご夫妻が訪ねてこられたときの写真が幾葉か残されている。

翌年5月にアメリカを去り、イギリスに滞在した後、夏頃からドイツに移ってベルリンに滞在して在外研究の仕上げの研究を行った。この時期はドイツ人の若手の研究者が助手役で手伝ってくれ楽しい研究生活を送ったようで、後年書いた「研究の思い出」というエッセイでこの頃のことを懐かしんでいる。ベルリンを出立したのは1930（昭和5）年1月で、数カ国を旅行した後、3月にナポリを出帆し、地中海、インド洋、コロンボ、シンガポール、香港、上海を経由して、神戸に到着したのは4月末であった。（続く）

活動報告

北大総合博物館ボランティアの会 第15回総会、講演会および懇親会の報告

ボランティアの会 会長 在田一則

北大総合博物館ボランティアの会第15回（2017年度）総会および講演会が2017年5月26日（金）16時から総合博物館1階の「知の交流ホール」で開催されました。講演会に引き続き、2階のボランティア控室(S224C)において懇親会が行われました。

以下に簡単に報告いたします。

総会（16:00～16:30）

総会は28名が出席して行われました。会長挨拶の後、以下の2016年度活動報告および2017年度活動計画の提案があり、承認されました。

昨年7月26日のリニューアルオープニングの後は来館者数が急増し、4月末までの入館者数は約167,000人ということです。

1. 2016年度（2016年4月～2017年3月）の活動

(1) ボランティア談話会（1回）

第32回談話会（12月9日、16名参加）中村晴彦氏（北大山の会）：坂本直行さんのあれこれ

(2) 博物館に押しかけよう会（1回）

第23回（2月4日）豊平館（12名参加）

(3) ボランティア ニュース（通常号4回）

第41号（16ページ、6月1日発行）、第42号（10ページ、9月1日発行）、第43号（10ページ、12月1日発行）、第44号（10ページ、3月1日発行）

(4) その他

*第14回総会、講演会および懇親会を5月27日に行った

講師：笠原 稔氏（北大名誉教授、元理学研究院附属地震火山研究観測センター長）

演題：札幌の地震

*忘年会を12月9日に第32回談話会のあとに行った

*ボランティアグループ連絡会（事務局）を適時金曜日の午後1時からS224Cで開催した



総会の在田会長

*ボランティア ニュース編集委員会

適時編集委員会を開催した。編集委員の努力により、年4回の定期発行を維持している。総合博物館の休館中は休載していた好評の「〇〇先生小伝」シリーズをリニューアルオープン後から再開し、五十嵐恒夫名誉教授による「館脇 操先生小伝」を連載した。

(5) 各グループの活動

出席の各グループの皆さんから各グループの活動状況を報告していただいた

2. 2017年度（2017年4月～2018年3月）の活動予定

2016年7月26日のリニューアルオープニングから10ヶ月が経過し、部屋の移動などの慌ただしさもなくなり、新しい環境に慣れて各グループのボランティア活動は落ち着いたものとなってきた。各指導教員のもとでグループ活動をさらに進めるとともにボランティアどうしの交流を深める。

(1) 全体の活動

勉強会（談話会・博物館へ押しかけよう会など）・懇親会を適時開催する

(2) ボランティア ニュースの発行

年4回の定期発行を維持する。「〇〇先生小伝」シリーズは、次号（No. 45、6月発行）から

栃内香次名誉教授（工学部）による「栃内吉彦先生小伝」を掲載する

(3) 各グループの活動

各グループの指導教員のもとでそれぞれのグループ活動をさらに進める

3. 2017年度の体制

(1) グループ連絡会メンバー

在田一則（会長、展示改訂（地学））・沼田勇美（事務局長、図書室業務）・星野フサ（植物）・志津木真理子（昆虫標本）・（考古資料）・寺西辰郎（展示改訂（地学））・（メディアボランティア）・今井久益（化石標本）・（展示解説）・新妻美紀（チェンバロ）・大山圭也（北大の歴史展示/平成遠友夜学校）・（リーフレット翻訳）・（4Dシアター運営）・（第二農場）・（ハンズオン）・（きたみてガーデン）

(2) ボランティア・ニュース編集委員会

星野フサ（委員長）・今井久益・大山圭也・久末進一・沼田勇美・山岸博子・石川満寿夫（顧問）
なお、2017年4月現在の総合博物館ボランティアは以下の通り（延べ人数は253名）

植物（31名）、昆虫標本（27名）、考古学資料（30名）、展示改訂（地学）（11名）、メディアボランティア（7名）、化石標本（48名）、北大の歴史展示（1名）、展示解説（25名）、リーフレット翻訳（1名）、平成遠友夜学校（11名）、4Dシアター運営（12名）、チェンバロ（10名）、図書室業務（14名）、第二農場（7名）、ハンズオン（13名）、きたみてガーデン（5名）

講演会（16:40～18:10）

講師：高橋英樹氏（総合博物館 特任教授）

演題：「北大と私」

懇親会（18:20～20:30）

講演に引き続き、ボランティア室（2階 S224C）において、講師の高橋さんほか11名が参加して、楽しく歓談した。



講演中の高橋英樹先生

高橋英樹先生の「北大と私」と題するご講演を、お聞きしました

植物ボランティア 星野フサ

この度、北大総合博物館の特任教授に就任された先生はおよそ80分間のご講演をされました。

「とても素晴らしい内容でしたね!」と、私の周りのあちこちから感動の声が広がっていました。

ご講演の内容の一部を紹介させていただきます。高崎市で出生され、東北大学に入学され、相馬寛吉先生の研究室において花粉形態について研究を継続されてこられました。大学院博士課程を終えられてから北大植物園に18年間、そして北大総合博物館に18年間勤務されました。食虫植物のモウセンゴケ科の研究をされ多くの業績を残されました。

1800年代からの宮部金吾先生に始まる北大の千島と樺太における植生調査をロシアとアメリカの研究者らとともに継続的に取り組み、千島と樺太の植物を花粉形態と遺伝子の研究を土台として追求し、過去の気候変動の枠組みとの関係を私たちボランティアにわかりやすく紹介されました。

特に印象に残りましたのは北サハリンではポロナイフキが多くなるということで、この葉には切



ポロナイフキ

れ目が多く私たちの周りで見かけるフキとは姿が全く違っていました。

北大総合博物館 行事予定

北大総合博物館は、6月から金曜日は夜9時迄開館され、コンサートやセミナーが開催されます。

6月9日(金)には、ポプラチェンバロと北大交響楽団のメンバーによる素晴らしいナイトコンサートがありました。

6月16日(金)には、ナイトセミナー「夜の博物館から時間旅行」が催されます。

その他、下記の多彩な催し物が予定されていますので、是非お出かけください。

◎宇宙の4Dシアター「お誕生日星座」

日時：6月18日(日)

① 11:00～11:30 (10:45 開場)

② 13:30～14:00 (13:15 開場)

③ 15:00～15:30 (14:45 開場)

場所：総合博物館1階「知の交差点」講演室

※全ての回の整理券を10:30より配布。

各回定員35名

◎北大エコキャンパス観察会

～サクシュコトニ川沿いの遺跡・花・虫～

日時：6月24日(土) 13:30～15:30

集合場所：総合博物館前

解散場所：遺跡保存庭園(北大構内)

◎バイオメテイクス市民セミナー(第67回)

『視覚センシングとロボット制御の高度化』

日時：7月1日(土)13:30～15:30

場所：総合博物館1階「知の交流」ホール

◎土曜市民セミナー

『体の“あぶら”の酸化と抗酸化』

日時：7月8日(土)13:30～15:00

場所：総合博物館1階「知の交流」ホール

◎カルチャーナイト2017

「星空とチェンバロの夕べ」

日時：7月21日(金)17:00～21:00

場所：総合博物館

・常設展示の延長公開 17:00～21:00 1～3階

・チェンバロ演奏会 18:00～18:50

1階「知の交流」ホール

・夏の星座の観望会 19:00～21:00

総合博物館前(雨天・曇天の場合は、1階「知の交流」ホールにて望遠鏡の説明会)

・宇宙の4Dシアター

①19:30～ ②20:15～ 1階「知の交差点」

※全ての回の整理券を18:45より配布。

各回定員30名

◎常設展示室新設 特別企画

「惑星地球の時空間」

日時：8月4日(金)～10月1日(日)

場所：総合博物館3階

◎バイオメテイクス市民セミナー(第68回)

『農作物の表面構造で害虫の被害が変わる?』

日時：8月5日(土) 13:30～15:30

場所：総合博物館1階「知の交流」ホール

◎土曜市民セミナー

『鳥、パンデミック、そして季節性インフルエンザ対策—人獣共通感染症克服戦略の要例として—』

日時：8月12日(土) 13:30～15:00

場所：総合博物館1階「知の交流」ホール

◎バイオメテイクス市民セミナー(第69回)

『昆虫や植物の濡れを物理と化学から考える』

日時：9月2日(土) 13:30～15:30

場所：総合博物館1階「知の交流」ホール

◎土曜市民セミナー

『北極の陸、川、海、と利用』

日時：9月9日(土) 13:30～15:00

場所：総合博物館1階「知の交流」ホール

(北大総合博物館事務室)

特別寄稿

館脇 操先生の思い出

小島 覚（農学部農業生物学科 1960 年卒業）

私は、昭和 30 年に福岡県にある宗像高等学校を卒業した。3 年生になり、卒業後の進路についていろいろと考えたが、実は私は、幼少時を満洲に暮らし、敗戦を北満の冊蘭屯という街で迎えた。今から思えば、想像を絶する苦難の道をたどりながらも、丸 1 年かかって日本(九州)へ引き揚げてきた。だが、九州に暮らしながらも美しい満洲の大地には無性に郷愁を感じ、できればまた満洲へ戻りたいと子供心に思っていた。

高校を卒業して大学を選ぶとき、豊かな満洲の自然の光景が脳裏を離れず、どうせ進学するなら北国へ行きたいと思っていた。当然のことながら日本で北国といえば北海道しかない。いっぽう小学校の教科書で、札幌農学校の設立に尽くしたクラーク博士のことを知り、「ボーイズ・ビー・アンビシャス」で名高い北大へぜひ行きたいと思った。

一浪ののち、さいわい昭和 31 年に北大教養部理類に入学できた。北大では、1 年半の教養課程を終えると、2 年生の後期から学部移行となる。私は、子供のころから野生植物が好きで、将来は植物の勉強をしたいと思っていた。植物を勉強するとなると理学部か農学部ということになる。そこで内容を調べてみると、理学部でできることは海藻の分類か染色体の研究ということだった。

植物とはいえ海藻にはさほど興味はなかったし、植物を潰して細胞レベルの研究にも興味はなかった。いっぽう農学部には館脇操先生という著名な植物分類・生態学の研究者がおられた。そうだ農学部へ行こう。こうして私は昭和 32 年の後期から農学部へ所属し、館脇先生のもとで植物生態学の勉強をすることになった。館脇先生の業績については五十嵐恒夫氏が本報で詳しく記述している。

館脇先生はいうまでもなく、日本列島はもとより、戦前から満洲、沿海州、千島列島、アリューシャン列島など北東太平洋アジア一帯を広く回られ、植物の分類・地理や生態を研究されていた。私が農学部へ移行した頃、館脇先生は自然相をよくとどめた日

本各地域の代表的な植生の実に精緻な記録を作られ、「日本森林植生図譜」というタイトルで研究論文として発表されていた。

私は館脇先生に連れられて「日本森林植生図譜」の調査に参加することになった。北海道各地を当時助手だった故伊藤浩司さんと歩き回り、大雪山麓や置戸や支笏湖周辺などで植生を調査し、館脇先生独特の手法であるベルト・トランセクトの設置に関わった。ベルト・トランセクトというのは、帯状区とも呼ばれ、ある地域の最も特徴的あるいは代表的な植生を記録するため、通常 5~10m、長さ 30~50m の区画を設定して、その中にみられる植物をすべて記録、樹木については毎木調査を行い、さらに樹冠側面図や投影図を描いて正確な植生の記録を作ることである。こうして大学の 3~4 年生の時期、その後、大学院修士課程に進学してからも、館脇先生のもとで北海道の植生調査に従事した。

その後 1967 年、縁あってカナダのブリティッシュ・コロンビア大学に進学し、同大学のクラジナー教授のもと、カナダの植生の研究を始めることとなり、以来 11 年をカナダで過ごした。1976 年 7 月、館脇先生は逝去された。その時私はカナダに在住していたため連絡を受けたのも遅く、先生のご臨終にはもちろん葬儀へ参加することも叶わなかった。ただ先生のご冥福を祈るのみだった。



館脇先生と調査メンバー(1961 年)
支笏湖畔にて、 筆者は、後列右

2005 年総合博物館ボランティアニュース第 3 号発行の頃

北大総合博物館 高橋 英樹

私は北大総合博物館の第一世代の研究部教員で、1999（平成 11）年 4 月に総合博物館が発足するにあたり、農学部附属植物園から移ってきました。今年の春で総合博物館に 18 年いた事になるので、何とも時の経つのは早いものです。その当時は理学部から移ってきた松枝さん、箕浦さん、阿部さん、文学部からきた天野さん、水産学部からきた今村さんたちが仲間でした（大原さんは公募され 2000 年度からの採用）。今では、現役の総合博物館教員としては阿部さん、大原さんがいるだけです。私はこの 3 月で定年退職となり、4 月から「特任」として働いております。

ボランティア組織を立ち上げようという議論はかなり早くからあったと思いますが、手元にある資料では、2001（平成 13）年から、学術標本の作製や整理のために「ボランティア活動員制度」により募集し始め、この年の 12 月頃には「30 名の学生、院生、教職員が活動している」とあります。とりあえず博物館教員の関連する学部・大学院の研究室の学生・院生・教職員などをかき集めてできたのが初期のボランティア組織だったと思います。そして、2002（平成 14）年 11 月 15 日に久万田会長の下、「ボランティアの会」が発足しましたが、ボランティアニュースの創刊号が発行されるまでにはさらに時間がかかり 2005（平成 17）年 2 月の事でした。

2005（平成 17）年 10 月に発行された 4 ページ立てのニュース第 3 号に、「2005 年夏のシベリア・マンモス展」として掲載された小さな皆さんへのお礼の記事が、私にとって初めてのボランティアニュースデビューでした。

企画自体は、当時シベリア調査などでお世話になっていた低温科学研究所の福田正己教授から持ち込まれた話で、シベリア・マンモスの臀部を特別展示するというものでした。

当初は愛知万博での展示のために借り出されたものでしたが、何らかの問題があり開幕 1 週間で展示取りやめになったといういわくつきの物でした。

ボランティアニュース第 3 号には、この特別展示の解説で大いに助けて頂いた博物館ボランティアの故中野系さんと寺西辰郎さんの記事も載っています。

「当初恥ずかしげに解説していた人も、後半は自信に満ちた解説へと進化した」、「仲間内の連帯感、責任感が生まれ、誰かが都合悪くなれば、お互い代役で助け合うようになった」（中野）。「私の拙い解説にも拘わらず、大勢の方から「解説ありがとう」とねぎらいの言葉をかけて頂きボランティア冥利に尽きる思い出いっぱいの日々でした」（寺西）。といった文章が残っています。初期のボランティア活動の熱い息吹を感じるような気がします。

現在の博物館ボランティアは各自の専門性は増したと思いますが、一方でボランティア会員の横の連帯感を感じる機会が少なくなったようにも思います。年寄りの思い出話で恐縮ですが、大学博物館活動を何とか軌道に乗せようと悪戦苦闘していたあの時代が、なんとも懐かしく思い出される今日この頃です。



搬入されたマンモスの臀部標本（2005 年 7 月末）

活動報告

化石ボランティア 石橋 七朗さんと中野 系さんを偲んで

理学院自然史科学専攻 博士課程 田中 公教

化石ボランティアの主な活動内容は、化石のクリーニングを行い、レプリカを作成することで、北大総合博物館の研究を支える大きな役割を担っています。しかしそれだけではなく、化石を中心に人が集まり、一般の方々、小学生から中高生、大学生まで、さまざまな年齢の人々がボランティア活動を通して交流する場でもあります。

2017年1月、化石ボランティアの創設者である中野 系さんと、2月には石橋 七郎さんがご逝去されました。このお二人と初めて出会ったのは2010年、私が北大の大学院に入学する前年でした。

石橋さんは化石ボランティアで最も年長者でした。博物館では化石の展示解説も行っており、分かりやすく面白い話をするための様々な工夫を教えてくださいました。ボランティアのお茶会では化石の話だけではなく、自分が描いた絵画の話などたくさんのお話をしてくださり、その多才ぶりにはいつも驚かされます。なかでも最も印象深かったのは、自身のシベリア抑留などの経験に基づいた戦争の話でした。これは先輩から聞いた話なのですが、ある日、石橋さんから詩をもらったそうです。そこには「國のため 重きつとめを 果たし得て 矢弾つき果て 散るぞ悲しき」と書かれており、後にそれは硫黄島で玉砕した司令官の辞世の句であることを知ったそうです。ほかにも二・二六事件が起きたときの話や、ラストエンペラー溥儀の弟の溥儀とロシアで一緒になった話など、石橋さんはまさに生きた歴史の教科書みたいな人だと思いました。それだけではなく、これからの若い人には絶対に戦争をさせてはいけないと言っていたのを、今でも強く記憶に残っています。

中野さんは化石ボランティアを立ち上げた張本人で、化石ボランティアの活動に最も長く関わっていました。いつも化石ボランティア全体のことを考え、新しいボランティアメンバーのためのクリーニングマニュアルの準備をして下さいました。中野さんに驚かされたのは、その知的行動力です。

大学で本気で古生物の研究をするために地質学をイチから学び、語学を磨き、北大総合博物館の研究生となり、大学院生と机を並べて2年間研究に励みました。北大総合博物館で行われたシンポジウムで自身の研究について講演を行ったこともあります。国際学会に出席するためにドイツを旅し、ベルリンからミュンヘンまで、約一週間かけて始祖鳥化石の調査を行ったこともあります。学生とともに学び、旅をし、若い世代と多くの時間を共有して下さいました。

北大の古生物学研究室には、毎年様々な学生が集まってきます。6年前、私もそんな新入生の一人でした。札幌で研究生生活を始めて以降、色々なことで悩んだりもしました。そんなとき、中野さんや石橋さんは「頑張んなさい」と一言、静かに背中を押してくれました。「学生が立派に育ち、学問の世界で活躍する日を楽しみにしている」といつも励まして下さいましたが、結局、間に合わなかったことが悔やまれます。学生にとって化石ボランティアの存在は大きく、これからもそれは変わらないことでしょう。

化石ボランティアの活動も転換期を迎えました。寂しくなります。お二人から、これまでに頂いた様々な恩や、学んだ多くのことを、今後のボランティア活動に還元していかなければと思います。



石橋 七朗さん



中野 系さん

活動報告

考古（骨）ボランティア 2016 年度活動報告

理学院 自然史科学専攻 進化古生物研究グループ 修士 2 年 田中 望羽

考古（骨）ボランティアでは鳥類を中心に哺乳類や爬虫類の標本を制作している。全身骨格・フラットスキン（皮・羽毛）・内臓などの液浸標本・筋肉の DNA サンプルを標本として保存しており、これらの標本は考古学だけでなく古生物学や生物学などの研究に利用されている。

一般に、日本の博物館では鳥の標本は剥製（仮剥製）あるいは頭骨のみが保存され、頭骨以外の骨標本はほとんど作製されない。しかし、動物考古学や古生物学の研究では骨の標本が必要だ。例えば、遺跡から出土した骨や化石がどの鳥のものであるのかを明らかにするには、現生の骨の同じ部位と比較することが重要だ。その一端を本ボランティアが担っている。フラットスキンを保管するのは、羽の模様や色といった骨にすることで失われる情報を補てんするためである。フラットスキンにするためには皮に付着した筋肉や脂を皮に傷をつけないように丁寧に取り除き、防腐処理をするのだが、骨格を作るのと同じかそれ以上に時間がかかる作業だ。液浸標本は現在摂食と消化の関係を明らかにする研究に使われ、化石として保存された舌骨や胃石の研究に応用される。

標本庫の整理、標本番号登録などのデータ管理も本ボランティアで行っており、個体の体長や体重、各部位の計測数値、分類群の確認、学名の記入、保管場所の整理を行っている。さらに剥製標本の受け入れ先としても機能しており、昨年度は外部施設より 52 標本の剥製を受け入れた。受け入れた標本は虫害を避けるために燻蒸作業を必ず行っている。

メンバーの大多数は北大の大学院生・学部生であり、理学部、文学部、工学部、獣医学部、農学部、水産学部等幅広い分野から参加している。また近隣の他大学（東海大学、酪農学園大学など）や社会人の「骨好き」も所属している。普段野鳥を見るメンバーも鳥に全く詳しくないメンバーもいて、標本化も分からないことがあればお互いに

教えあうような環境となっている。私も昨年 4 月ごろに「骨が好き」という理由から当ボランティアに入った身だが、野鳥を観察する、もしくは標本を作る経験はおろかメスすら握ったこともなかった。そのためまずは自分よりも経験が長いメンバーに教えてもらうことで一通りの作業の流れをつかんだ。今も年齢にかかわらず、経験の長いメンバーが初心者にアドバイスをするのを見ることが出来る。

昨年度の標本は表 1 の通り、引き取った剥製をふくめ 92 標本が作製・登録され、累計 262 標本が作製されている。一部不完全なもの、上腕骨や大腿骨のみのもものも含まれているが、ラベリングされていることで研究資料として活用が可能だ。

毎週コツコツと標本化しているのだが、二つある業務用冷凍庫にはまだまだ標本化されていない個体がたくさん入っている。

表 1 作成標本数

	2016 年度(標本)	累計
鳥類	86 (うち剥製 52)	248
哺乳類	2	10
爬虫類	4	4
計	92	262



活動の様子

活動報告

新渡戸稲造・萬里子（メアリー）からの贈り物再発見

資料部研究員 佐藤 広行

2016年11月、植物ボランティアさんと標本整理中に、標本棚から古く痛んだカバーに包まれた状態で、新渡戸萬里子からの寄贈とされる4点のシダ植物（エゾデンダ属）の標本を見つけた。

新渡戸萬里子は、札幌農学校2期生の新渡戸稲造の妻（旧姓：メアリー・エルキントン）で、稲造のアメリカ留学中に知り合い、札幌農学校教授として帰国する直前の1891年にフィラデルフィアで結婚した。来日後、萬里子は乳母でエルキントン家に生涯仕えた女性から1,000ドルを遺贈され、稲造の提案で様々な事情で就学出来ない児童のため、無償で教育が受けられる遠友夜学校を設立した。また、稲造の英文著書『武士道』の出版にも深く関わった人物である。

今回見つけた4点の標本は、ラベルからカリブ海周辺の西インド諸島で採集されたもので、マルティニーク島で採られた標本もある（図参照）。ラベル作成者は、筆跡から稲造の親友で札幌農学校で共に学んだ初代北大植物園園長の宮部金吾によるもので、宮部が標本として仕上げたと考えられる。しかし、残念なことに標本に必要な採集年月日の記述がなく、いつどのような経緯で標本を採集したのか疑問が残る。

マルティニーク島は、コロンブスが「世界で最も美しい場所」と称賛した島で、ナポレオンの妻ジョセフィーヌが生まれた島でもある。ロマンティストでなくとも、稲造と萬里子がハネムーンでマルティニーク島を訪れ、当時札幌農学校教授となっていた宮部のために、南国の植物を採集したのではないかと想像するのは、真っ当であろう。

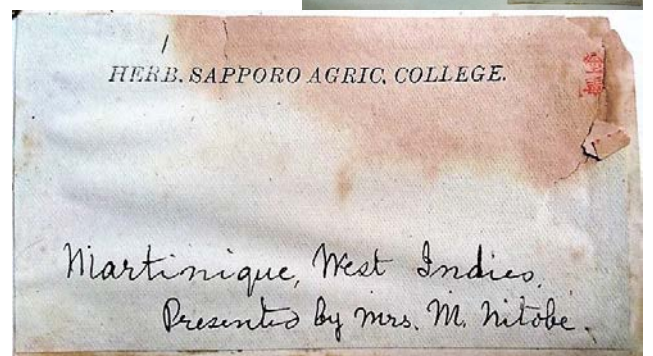
そのような想いを持って調べていると、1912年に稲造がマルティニーク島を訪れている記録があった。当時、アメリカでは日本に対する批判的な誤解が広まっており、「太平洋のかけ橋になろう」と1911年に日米交換教授第1号として稲造は渡米しており、アメリカ各地で翌年5月までに日米友好のための講義を166回も行った。夫婦同伴の渡

米だったが、講演の合間の1912年2月に稲造は、萬里子を伴わず、秘書の鶴見祐輔と2人で西インド諸島からパナマ運河を巡視する4週間の船旅に出た。その途中にマルティニーク島にも訪れ、ヤシ科の常緑高木のピンロウジュが2~3株高くそびえるジョセフィーヌの大理石像下で写真を撮ったという。

従って、標本ラベルでは萬里子からの寄贈標本とあるが、萬里子はマルティニーク島へは同行しておらず、実際の標本採集者は稲造であり、宮部のために採集した標本を、妻の萬里子へ預けたと考えるべきであろう。よって、不明であった標本の採集年月日は1912年2月頃と考えられる。

新渡戸稲造という北大の歴史のみならず、日本近代史にとっても重要な人物が採集した、標本の再発見に繋がったのは、日頃から、標本整理に御尽力下さる植物ボランティア各位の丁寧な作業によるものである。この場を借り、感謝を申し上げる。

今回見つかった4点の標本は、新渡戸稲造・萬里子と宮部金吾との関係を裏付ける貴重な標本で、「北大の宝」とも言えよう。



新渡戸夫人より送られたエゾデンダ属の標本（上）とラベルの拡大図（下）

活動報告

チェンバロボランティア活動報告

チェンバロボランティア 新妻 美紀

1月22日のニューイヤーコンサートに続き、3月20日のコンサートは、北大交響楽団の学生の企画にチェンバロボランティアが協力するコンサートでした。卒業した先輩たちが、チェンバロとのアンサンブルの楽しさを、後輩メンバーに受け継いでいってくれました。

3月20日は、永井秀奈さん(現在、大学院工学院応用物理学修士1年)が企画し、ヴィオラ奏者7名とチェンバロとの「大バッハとその息子たち」、ヴィオラだけの作品を集め、珍しく、また興味深いプログラムで、多くのお客様で埋めつくされ、学生たちの生き生きとした演奏で盛り上がりました。特に、大バッハの有名なシャコンヌを、4本のヴィオラでの演奏は、圧巻でした。

コンサート活動だけを挙げれば、とても華やかに見られがちですが、チェンバロボランティアは、日頃、チェンバロ室の温度、湿度の環境チェック、チェンバロの状態を把握し、たまに起こるアクシデント、例えばプレクトラムと言われる弦をはじく爪が折れたり、弦が切れたりの対処をしています。それ以外の細かなメンテナンスに対処出来ない時は、調律師の小野さんが駆けつけて下さいます。日頃のメンテナンスの延長上に、チェンバロの音色を来館された方々にお届けするミニコンサートも再開しました。北大の宝物の一つとして、知名度も上がり、チェンバロの存在の大きさも実感しています。学生ボランティアが2名加わり、さらにチェンバロに目をかけてくれる人が増えました。

チェンバロが製作されて、昨年で10年が経ち、昨年10月には、チェンバロ製作者の横田誠三さんにお越し頂き、大々的なメンテナンスで、約4分

の3の弦の張り替えもして下さり、新たなチェンバロの音色が生まれました。

4月30日の「バロック音楽の調べ」では、フルート、リコーダーの方をゲストにお迎えし、華やかなコンサートになりました。

活動にあたりましては、担当の大原先生、山本先生、博物館の先生方、スタッフの方々には、いつもお力添え頂いておりますこと、感謝申し上げます。

毎週水曜日午後2時から、30分ほどの気軽に立ち寄って頂けるミニコンサートをしています。

皆様のお越しをお待ちしています。

※都合により、演奏できないこともあります。ご了承ください。



3月20日のコンサート終了後の新妻さんとヴィオラ奏者の7名の学生たち

「訂正」

43号のp.9の左段落、9行目の「今井さん」は、「小川さん」の誤りでした。お詫びして訂正します。

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 45

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、大山、沼田、久末、山岸）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2017年6月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>